

称号及び氏名	博士（人間科学）	重信 あゆみ
学位授与の日付	2020年3月31日	
論文名	西王母と女媧—二人の神—	
論文審査委員	主査	大形 徹
	副査	大平 桂一
	副査	中村 治
	副査	河野 道房（同志社大学大学院文学研究科教授）

## 論文要旨

西王母と女媧は共に中国を代表する女神である。西王母は「道を体得した神」（荘周（前 365-290）『荘子』大宗師）、女媧は「化する神」（屈原（前 343-277）『楚辞』天問）である。

本論では西王母と女媧について考察した。ほぼ同時代に、似た役割をもつ西王母と女媧であるが、管見の限り、女媧と西王母の関係を記録する文献は見当たらない。そのため西王母と女媧を比較考察した論考もほとんどない。

しかし図像では西王母と女媧は同じ画面に現れる。本論の目的は、文献上ほとんど言及のない女媧と西王母の関係について、画像石等の図像から考察しようとするものである。

ここでいう図像は古くから伝わる絵画ではなく墓室内の画像石等の出土資料である。山東省武梁祠画像石は北宋欧陽脩（1007-72）『集古録』にみえる。後、1786年に清の黄易により世に知られ、容庚が1936年に『漢武梁祠画像録』を出版し、現在は『中国画像石全集』（全8巻）（2000年）が山東・江蘇・安徽・浙江・陝西・山西・河南・四川等の画像石を紹介している。ここに女媧や西王母の図像が多くみえる。1972年、湖南省馬王堆漢墓から帛画が発見され、上部に描かれる女神が女媧とされ、曾布川寛は天帝と解している。図像を丹念に考察すると当初、天帝であった女媧が、次第に地位が低下し、西王母の侍臣となるとい

う大きな流れがみえる。文献上、関わらなかったものが図像では絡み合い、立場が変化していく。墓室内の画像石は当時の死生観を表現したものであるが、意外なほど儒教とは関わらない。当時の絵画は呪術である。被葬者が天界に復活再生するようと、そのような絵を描いたのであろう。女媧と西王母の変化を辿ることにより当時の死生観の変化を探ることができるのである。

西王母と女媧の図像を楊利慧は「女媧は西王母の部下あるいは姉妹であった」とするが、考察は簡単にすぎ、根拠も不明である。画像石では女媧は伏羲とともに描かれるようになる。前漢河南唐河針織廠墓では女媧・伏羲は墓の奥の主室に描かれている。最奥に描かれているのは、女媧が天帝であった名残りかもしれない。後漢山東沂南漢墓では西王母は墓門に描かれている。この時期の西王母は門番のようである。後漢中晩期山東微山縣兩城鎮では西王母を中心に配され、女媧と伏羲が両側に侍臣のようである。ここでは女媧と西王母の立場が逆転している。

第一章では西王母を考察した。文献上では「道を得た（『莊子』）」「人のように豹尾虎齒（『山海経』）」「帝の女（『穆天子伝』）」「不死の薬を持つ（『淮南子』）」「西王母の書をもつものは不死（『漢書』）」「仙女を統括する西王母（『漢武帝内伝』）」とさまざまに紹介されている。

『山海経』西山経の「如人」「豹尾虎齒」が姿を説く最も古い資料である。小南一郎は「人と獣の間のような姿」としており、この姿は後の仙女としての西王母の姿とはかけ離れている。「天の厲及び五残を司る」と記され、災いや刑罰を司ると考えられていた。人々はこの神を祀り、疫病や災い、刑罰を避けようとしたのであろう。小南は西王母が「いささか異民族的な性格を備える神」と記している。四川の西王母は龍虎座（椅子）に座るがエジプトのイシスや中央アジアの女神も椅子に座る。

『山海経』では西王母が女であるという記述はない。後漢早期山東滕州市出土の「田王母」という隷書が刻された画像石では髭を生やした男の姿で描かれる。隷書の「西」と「田」は似ており「西王母」と見なされている。清趙翼（1727-1814）は「王母寡」の例を挙げ、「母」と記されても女とは限らないという。男かもしれない。

馬王堆帛画の地下世界に描かれる「力士」は「西王母」かもしれない。『山海

経』で西王母は穴処し、『列仙伝』では石室に住む地下の神である。大形徹は「力士」はエジプトの神、ベスかもしれないという。李松は西王母は外来の女神の影響を受けているとする。

『穆天子伝』では西王母自ら「帝の女<sup>むすめ</sup>」と称す。女である。前漢末の哀帝の頃に西王母信仰が爆発的に広がる。『漢書』五行志には「母、百姓に告ぐ。此の書を佩ぶる者は不死」と西王母が死を避ける神であったと記される。

六朝期の『漢武帝内伝』『漢武故事』では西王母が漢武帝に桃を渡し共食する。西王母と穆王の共食を描いた『穆天子伝』をふまえるのであろう。

梁陶弘景『真誥』に「天門に入り、金母に揖し、木公を拜す」とある。画像石墓で墓門に描かれることと関連するであろう。そして門に描かれることが東王父を生み出す契機となったのであろう。「西」に対して「東」、「母」に対して「父」という対の観念により、西王母に対して東王父と名付けられたのであろう。この時、「母」は音訳ではなく「母<sup>はは</sup>」と認識されていたことがわかる。

第二章では女媧について考察した。文献の記載や図像により、女媧の役割は「生み出す」「化す」であった可能性について言及した。前漢馬王堆帛画上部中央に描かれている女媧は上半身が女性で下半身が蛇である。小島瓔禮は蛇は脱皮し、生まれ変わるようにみえることから、不死や再生のシンボルとしている。女媧の下半身が蛇なのは再生の象徴であろう。馬王堆帛画が被葬者の復活再生を願って描かれたとすれば、被葬者は天界の女媧の所にまで昇り、天界に生まれかわることになる。

女媧は『楚辞』天問が初出である。「女媧、体有り、孰か之を制匠せん」と記され、女媧の体を作ったのは誰かということが問題とされている。『山海経』大荒西経では「神、十人有り、名づけて女媧の腸と曰う。化して神と為る、栗広の野に処り、道に横たわりて処る」と記載され、「化す」ことが記される。

大野裕司は睡虎地秦簡『日書』の「女果」を「女媧」とし、「女子事」（妊娠、出産）を司る神としている。ここでは生み出す神である。

河南唐河針織廠墓では女媧と伏羲の間には「高媒神」が描かれる。『風俗通義』（逸文）には、「女媧、神祇に<sup>いの</sup>禱祠りて女媒と為る、因りて婚姻に置く」と記載されている。「高媒神」自体も女媧が変化したものかもしれない。

第三章では女媧と西王母の図像における関係を考察した。「女媧・伏羲」と「西

王母・東王父」が共に描かれる図像を取り上げ、配置の変化より「女媧・伏羲」と「西王母・東王父」の立場が逆転をしていることを指摘した。

曾布川寛は馬王堆帛画を上・中・下に区分する。上段を天上、中段を地上、下段を地下の世界とみなし、テーマは墓主人の昇仙であるとする。昇仙の経路は下の祭祀から崑崙山までとし、天帝の所に昇るのかについては分からないとする。また地下の水の世界は大地を支えるモチーフを中心に展開しているとしている。筆者は地下の水の世界・地上・天上は連続した昇仙のモチーフであると考え。地下に沈んだ太陽は湯谷で湯浴みをして扶桑の枝の先から新しい太陽として生まれ出ると考えている。同様に墓主も埋葬された地下の世界から地上を経て天上の女媧の所にゆき、復活再生するのではないか。

馬王堆帛画の復活再生の構図は画像石墓においても受け継がれる。河南唐河針織廠墓出土の画像石では、女媧と伏羲は北主室北壁西端に描かれる。女媧が天帝として認識されていたからであろう。しかし女媧単独ではなく伏羲とともに描かれる。この画像石墓では西王母と東王父は描かれていない。馬王堆帛画も河南唐河針織廠墓出土の画像石も前漢のものである。

後漢の山東嘉祥縣武宅出土の画像石では、前石室の入り口、西壁上石に西王母が描かれ、東壁に東王父が描かれている。そして前石室屋頂には女媧と伏羲が描かれている。女媧と伏羲は屋頂の画像石の二層目に描かれ、一層目には笏を持つ人物が神人などを迎え入れるように描かれている。

後漢山東沂南漢墓の画像石では、墓門に西王母・東王父が描かれている。そして東王父の上に女媧・伏羲が描かれている。また同時代の山東微山縣の画像石には中央に西王母、左右に女媧・伏羲が侍臣のように描かれている。図像の世界では女媧と西王母の立場の逆転がおきたようである。

第四章では西王母の源流の一つがエジプト由来のベスである可能性について述べた。ベスは地下世界に住み、子供や女性を悪霊から守る神で、ライオンの姿で豹皮の貫頭衣を着、豹の尾を垂らすものもある。これは穴処し、豹尾虎歯とされる西王母に似ている。ベスは中央アジアのアルタイ地方でも発見されており、エジプトから東にも伝播している。大形徹は、馬王堆帛画の地下世界の力士を、半裸で足を曲げるという姿形の類似から、ベスではないかと推測する。そうであるならば、「ベス≒力士≒西王母」という構図を描くことができるであろう。

荊州の三段式の後漢鏡には子供を抱く女媧が描かれている。これはエジプトのホルスを抱くイシスに似ている。キリストを抱くマリア像はイシスにもとづくとされているが、その図像が中国にまで伝播したとすれば、それは女媧であろう。

それらを馬王堆漢墓に適用させると、帛画の女媧はイシスのイメージを投影した天神で、西王母はベスのイメージを投影した地下の神となる。そうであれば、エジプト的な復活再生観念の影響を受け、ある時期における中国の死生観が生み出されたことになる。

おわりにでは、文献上では知り得ないことが図像の世界を手がかりとして解明される可能性が存在することについて述べた。儒教の『儀礼』には葬儀や埋葬の儀式を事細かに説かれている。ところがその儀式に見られる世界は、馬王堆帛画や後漢の画像石の描く世界とは不思議なほど重ならない。儒教には女媧も西王母も現れないのである。以上の考察の結果、まず図像とそれにまつわる死生観が伝わり、それが文献の世界とは独自に変化し、女媧と西王母による死生観、つまり文献には見られない死生観を形成していったと考えることも可能であろうと結論づけた。

## 学位論文審査結果の要旨

学位論文提出者氏名 重信あゆみ  
学位論文題目 西王母と女媧—二人の神—

本学位論文審査委員会は、人間社会システム科学研究科人間社会学専攻人間科学分野の博士論文審査基準に照らして厳正な審査を行い、以下の評価と結論に至った。

### 1) 研究テーマが絞り込まれている。

本論は、西王母と女媧という中国を代表する二神が何なのか、また相互にどのように影響しあっているのかという根本的な問いに対し、文献資料および画像石や鏡などの図像資料から解明を試みたものである。これまで、それぞれの神については、一定の考察はあるものの、文献上、ほとんど交渉がないため、これまでこの二神の関連を中心に考察した論考はなかった。

### 2) 研究の方法論が明確である。

本論は、中国哲学の伝統にもとづく文献の緻密な解釈に加え、美術史的図像解釈や考古学的知見をも駆使して記されている。これは、かつて王国維が説いた二重証拠法に似ているが、考古学的資料によって文献資料の正しさを証明するというものではなく、むしろ、文献にはまったくあられなく、図像のみにあられている西王母と女媧の交渉を中心にして考察している。これはこれまでにない新たな方法論といえる。

### 3) 先行研究が十分に踏まえられている。

西王母に関しては『西王母文化研究集成』6冊がある。これは文献資料巻2冊、考古報告巻1冊、論文巻3冊に分かれており、主要なものが収められている。これをもとにして新たなものも加え、144種の書籍・論文を参考文献としてあげている。あわせて女媧に関しても、12の書籍・論文を参考文献としてあげている。両方に共通するものとして『中国画像石全集』全8巻を、関連するその他の文献として90の書籍・論文を参考文献としてあげている。ただもう少し先行研究の研究史に対するより明確な評価が求められる。

西王母は「道を体得した神」（荘周（前365-290）『荘子』大宗師）、女媧は「化する神」（屈原（前343-277）『楚辞』天問）というのが初出である。それ以外の基本文献である『史記』『漢書』『山海経』等を十分に吟味しているのみならず、先行研究としてあげた膨大な文献を咀嚼して考察している。以上、本論は、西王母と女媧、その周辺をも含めた先行研究を精査し、思想的検討を行っている。

4) 結論に至る論理展開が説得的である。

本論では、さまざまな図像資料を駆使して、その図像の変化をもとに説得的に議論が展開されている。西王母と女媧の図像を楊利慧は「女媧は西王母の部下あるいは姉妹であった」とするが、考察は簡単にすぎ、根拠も不明である。これはある時期の女媧と西王母の図像に対して、感じたことを述べたようにみえる。それに対して本論では以下のように議論が進められる。馬王堆漢墓の帛画では女媧は天帝のように上部に描かれる。画像石では女媧は単独ではなく、伏羲とともに描かれるようになる。前漢河南唐河針織廠墓では女媧・伏羲は墓の奥の主室に描かれている。最奥に描かれているのは、女媧が天帝であった名残りかもしれない。後漢山東沂南漢墓では西王母は墓門に描かれている。この時期の西王母は門番のようである。ところが、後漢中晩期山東微山縣兩城鎮では、西王母を中心に女媧と伏羲が両側に侍臣のように描かれている。当初、天帝と目された女媧が、ここでは女媧と西王母の立場が逆転し、侍臣のようになっているのである。このように図像の変化を年代順にたどり、女媧と西王母の地位を確認していく方法は、一部に論旨の乱れがあるとはいえ、十分な説得力をもっている。

5) 研究内容に独創性があり新しい知見を提示している。

本論は、これまでおもに文献から考察されていた西王母と女媧について、図像学の立場から考察を加え、これまでにはない全く新しい知見を導きだしている。1972年、湖南省馬王堆漢墓から帛画が発見され、上部に描かれる女神が女媧とされ、曾布川寛は天帝と解している。それにもとづき、図像を丹念に考察した結果、当初、天帝とされていた女媧であるが、次第にその地位が低下し、女媧が西王母の侍臣となるという流れを本論は見出した。文献上、もとは関わらなかった女媧と西王母が図像では関わり、相対的な立場が変化していく、そのことを指摘した本論は十分に独創性を備えているといえる。

6) 当該研究領域の発展に貢献する学術的価値が認められる。

本論は、文献と図像をもとにして考察している。画像石の時代に図像の中でさまざまな変化がおきている。それを軸にして考察したときに、これまでの観点とは、まったく異なる結論が得られた。そしてそのことが、その後の西王母と女媧の道教での立場に影響を与えることになったという。その過程について実証している点において、当該研究領域の発展に貢献する学術的価値が認められる。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員一致の結果、本論文を博士(人間科学)の学位に値するものと判断した。